

アジアに向く 関西

世界の新しい牽引役として成長を続けるアジア。
そのアジアと長い歴史的・文化的つながりを持つ関西。
アジアに向き、アジアの人々との関わりの中で
試行を続ける関西の姿を追ってみた。



神戸・南京町

「神戸復興の灯」をともす

神戸のＪＲ元町駅東口から少し南へ。ビルの谷間に建つ白亜の長安門をくぐり、赤や黄、緑など極彩色に彩られた神戸南京町に入る。南京町広場を中心に東西、南北に伸びる街路の両側に、中華レストラン、餃子や豚まん、点心、ラーメンなどの店、中華食材や中華雑貨、和洋食レストラン、中国茶、喫茶やスイーツ、漢方薬などの店が軒を連ね、そぞろ歩きするだけで心が浮き立ってくる。神戸南京町は日本三大中華街の一つで、活気ある「異国情緒」に満ちている。しかし、南京町商店街振興組合理事長の曹英生さんによれば、現在、振興組合加盟店九十五軒のうち、中国系と日本系の割合はほぼ半々で、日本社会にしっかりと根づいた、ユニークな「共生型」チャイナタウンである。

そんな神戸南京町の人々の心意気が存分に発揮されたのが九五年一月の阪神淡路大震災直後だった。

「このままだと神戸も人口流出しかねない。神戸の人々に、熱いものを食べてもらい、早く元気になつてもらおうと、振興組合で炊き出しをすることに決めました」と曹さんは振り返る。被害が比較的軽かった南京町では、炊き出し当日、二十店舗近くが屋台を出し、熱々の饅

頭やラーメン、コロッケなどを提供。同時に義援金を募り、営業を再開し、多くの被災者たちの胸に「復興の灯」をともしていった。

また、神戸華僑歴史博物館館長の藍璞さんによれば、震災直後、神戸華僑の子弟が通う神戸中華同文学校が避難所として被災した周辺住民を受け入れ、地域の人々との親密さが一段と深まったという。

「震災で失ったものもたくさんありました。が、それによって、楽しいことは一緒に喜び、悲しいことも一緒に悲しみ、みんなで頑張っていこう、という気持ちの人が増えたのが嬉しいですね」（曹さん）

華僑が世界で一番「現地化」したまち

神戸華僑の歩みは、一八六八年一月の兵庫（神戸）開港とともに始まった。「初期の神戸華僑は貿易関係や居留地関係の洋服仕立、理髪、料理人、靴職人などで、彼らは居留地西側の雑居地に暮らし始めました」（藍さん）。その一角に、華僑向けの食材市場となる南京町が誕生。居留地周辺が賑わい、華僑人口が増えるに従って、神戸の華僑社会も発展した。明治半ば以降、山手方面に心の拠り所となる関帝廟や、中華会館、華僑学校（現・神戸中華同文学校）を開設。南京町には店が増え、漢方薬や



- ①旧暦で祝う中国の正月・春節祭の龍踊りで活躍する、中国特製の龍
- ②まちかどの屋台、メニューを選ぶのも楽しみの一つ
- ③南京町広場は休息や記念撮影のスポット
- ④蒸しあがったばかりの包子やチマキを並べる屋台



和歌山・白浜

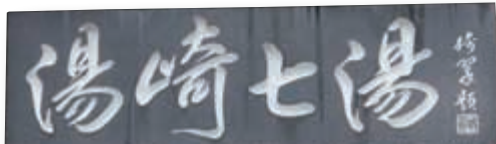
ようこそ、温泉好きのアジア人観光客

「これまでアジアからは団体客が多かったのですが、近年は家族や小グループの個人客で『クエを食べたい』『温泉に入りたい』『ゴルフをしたい』『世界遺産の那智の滝を見たい』と、それぞれ目的を持って来られる方が増えました」と白浜観光協会会長の中田力さんは語る。中田さんによれば、主要ルートは関空からだが、最近

和歌山県では、地元観光業界と自治体による、海外、特にアジアでの積極的な観光客誘致活動が効果を発揮。和歌山県観光局によれば、温泉や海鮮料理、海や山、春の桜や秋の紅葉などが好評で、〇八年の、同県への外国人観光客（宿泊者延べ数）十六万八千余人のうち、台湾、香港、韓国、中国などアジアから十二万一千余人と、七割以上を占めた。

前日午後、関西国際空港から白浜に直行。宿泊先のホテルで名物の海鮮料理と梅樽温泉を堪能したマカオからの「美食」ツアー客は、朝八時半、ホテルを出発。名所千畳敷や三段壁、円月島を巡って海と岩が織りなす雄大な風景を楽しみ、北上して、和歌山マリーナシティ内の黒潮市場に到着。目の前で解体されたマグロの刺身に舌鼓を打ち、みかん狩りののち、和歌山城を見学。その後、京都に向かった。

アジア発、関空・白浜空港へ



雑貨などは華僑商人が、生鮮食品や乾物などは日本人商人が扱い、大勢の買い物客で賑わったそうだ。

しかし戦争で神戸は空襲に遭い、南京町一帯も焼け野原となった。戦後は、民間貿易の再開で港湾都市神戸が復興、貿易業務に精通する華僑たちが活躍した。もっともこの頃から、神戸中華同文学校を卒業後、家業を継がず、日本の高等教育を受けて日系企業へ就職する若者も増えた。藍さんによれば、華僑社会の日本化が進んだわけで、「世界で一番現地化したのが神戸の華僑だと思います」と言う。

戦後の南京町に生まれ育った曹さんによれば、少年期、南京町には外国人バー以外、一軒の中華料理店と中国の乾物店くらいしかない頃もあった。そこで七〇年代後半、南京町の復活を願う店の人たちが南京町商店街振興組合を結成。区画整備事業を始め、八五年秋に長安門を竣工させた。「ハードが揃った。次はソフトだ、と青年部を中心に春節祭を企画しました」（曹さん）。八七年一月末の第一回春節祭には四日間で二七万人の観光客が集まり、長大な龍踊りや獅子舞、拳法演武、中国舞踏などを楽しみ、南京町は一躍、全国的な観光地となった。

「中国では今も正月は旧暦で祝います。春節祭は、日本の人たちに中国文化を知ってもらいたい機会です」と、藍さんは笑った。

- ①商売の神としても知られる、三国志の英雄・関羽を祀った関帝廟
- ②神戸華僑の子弟が通う神戸中華同文学校
- ③神戸華僑歴史博物館に展示されている、南京町の春節祭と中秋節のパンフレット



は中部国際空港から伊勢、勝浦経由で白浜に入り、関空から帰国する台湾や香港からの観光客も少なくないとか。また和歌山県による南紀白浜空港への国際チャーター便の誘致にも成功。○九年一月から四月までの四カ月間で、台湾から合計十八便、二〇九四人が来訪された、と和歌山県南紀白浜空港管理事務所総務課長の生駒健夫さんは言う。

観光客誘致行脚と名物づくり

白浜の観光業界が初めて台湾へ観光客誘致に出かけたのは三十年ほど前。豊かになった日本人が国内観光から海外観光へとシフトしていった頃だった。

「外国の方々は、まず東京や京都などの大都市に行かれます。そこで二回目、三回目はぜひ和歌山の温泉地へ、と訴え、フェリー会社と提携し、東京から船旅を楽しんでもらって那智勝浦港に入り、白浜に一泊。帰りは大阪の日本橋で電気製品を買って帰国する、というルートをつくり、とても評判がよかった」（中田さん）

以後、白浜の人たちは、香港、韓国へと誘致活動を拡大。九四年、アジア路線の充実する関西国際空港が開港し、アジアからの来訪者は着実に増えていった。しかし、単に誘致活動をするだけではお客は来ない。白浜では、地道に観光基盤の開発に取り組んだ。

例えば、「幻の魚」と言われるクエなど、いくらおいしくても水揚げが少なければ、「名物」として訴えるこ

和歌山・白浜



買い物客を惹きつけるエネルギーなまち

中国からのツアー客だろうか。黄色い旗を持った添乗員を先頭に、二十人前後の観光客が道頓堀通を歩き、戎橋筋との交差点で散開。三々五々、難波方面や心斎橋筋方面、ブランド店が並ぶ御堂筋方面へ向かって歩きだした。大勢の通行客に交じるとわからないが、今、ミナミには、毎日、アジアからのグループや個人観光客が詰めかけ、ショッピングやグルメを楽しんでいる。

戎橋筋商店街振興組合が加盟店を対象に実施したアンケート調査結果によると、売上の何割かはアジアからの観光客という店がほとんどで、なかには売上の三〜四割を占めるケースもあった。ミナミでのショッピングで目立つのは、ドラッグストア（薬や化粧品）やアクセサリー、ファッション、バッグの店、家電店や百貨店など。グルメでは、道頓堀界隈のたこ焼き、ラーメン、寿司や海鮮井などが好評で、クチコミで広がる一方とか。同じ大阪でも、キタと違って、ミナミはアジアの都市に似て、どこか混沌としたエネルギーに満ちている。アジアの人々は、ショッピングやグルメだけでなく、まち自体を楽しみに来られているのではないかと、戎橋筋商店街振興組合の活性化事業統括マネージャー・山本英夫さんは言う。そんなアジアからの観光客により楽しくまち歩きを体

大阪・ミナミ

アジアからのショッピングツアーのメッカ



道頓堀を行く中国からのツアー客



- ①白浜名物の一つ、特産の梅漬け樽を再活用した、梅樽温泉
- ②和歌山マリーナシティ内の黒潮市場でマグロの解体ショーを見学
- ③みかん狩りを楽しむ



とはできない。そこで三十年ほど前、中田さんたちは地元にある近畿大学水産研究所にクエ養殖法の開発を依頼。近年、ようやく地元の名物料理として確立した。

また、二〇〇〇年にはハワイのホノルル市に働きかけ、白良浜とワイキキビーチの姉妹浜提携を実現。相互の観光交流を深めるだけでなく、アジアの人々に白浜でワイキキ気分を味わえることをアピールしていった。二〇一〇年九月にはハワイアンデーを設け、フラダンスの発表ステージをつくる計画もある。さらに、アジアでは韓国・ソウル近郊の果川市と友好姉妹都市提携を結ぶなど、今後の観光客誘致促進に向けて地域をあげて取り組んでいる。

「観光地も進化しないとけません。東アジアの方々が日本に来やすい環境をつくり、白浜を『ハブ』に、徳川御三家の本拠・和歌山城や、世界遺産の熊野、那智勝浦へと、日本を体験できる旅を提案しています」と中田さんは力を込めた。



験してもらうために、同振興組合では、難波にある専門学校
の留学生と教員たちの協力を得てモニタリング調査
を実施。外国人客が来店しやすい接客ポイントを提案し、
各店に応じた接客ツールや外国語表記マップを作成し活
用している。実際、老舗の蒲鉾店が販売する揚げ立ての
天麩羅に外国語の説明文を掲示したところ、食べ歩きや
ホテルでの夜食用に購入するアジアのお客が増え始めた
とか。

「異国へ行ったら、誰でも異国文化に触れたいと思う
はず。受け入れ側の店が、小さな工夫でも、できること
から取り組み、ミナミの良さ、面白さを伝えていきたい
ですね」（山本さん）

家電もポップカルチャーも

アジアからの買い物客が目指すミナミの名所の一つ
が、電気部品店や家電店が集まる日本橋筋商店街界隈だ。
最新の情報家電を選んだり、地区内にある免税ショップ
で、帰国前にカメラや時計、貴金属などを買っていくア
ジアからの観光客も少なくない。

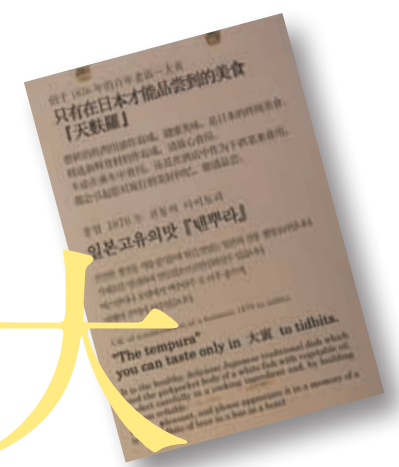
同地区周辺には専門学校に学ぶアジア人学生が多数暮
らしていて、国際色豊かな若者のまちとしての側面もあ
る、と日本橋筋商店街振興組合理事の塩田浩司さんは言
う。流行に敏感な若者の集まる日本橋筋界隈は、塩田さ
んによれば、九〇年代以降、パソコンからゲームソフト
へ、映画ビデオからアニメビデオ、アニメDVDへ、さ

らにキャラクターグッズやフィギュアへと新陳代謝し、
近年は、週末、マニアやオタク向けの店が並ぶ「オタロー
ド」が賑わっている、とか。

そんななか、同振興組合では、〇八年以来、関西国際
空港とタイアップして、毎年九月に「ジャパン・ポップ
カルチャー・フェスティバル」を開催。〇九年七月、塩
田さんたちは、台湾最大のアニメイベントに参加し、大
阪へのツアーを募ったという。

「韓国や台湾、中国の若者の間で、日本のアニメや
ファッション、音楽などのポップカルチャーが注目され、
どんどん浸透しています。日本には、秋葉原だけでなく、
大阪の日本橋にもそんなポップカルチャーのまちがある
ことをもっとPRして、アジアの若者たちを呼び込みた
い」と塩田さん。

日用品から衣料、雑貨、家電、ポップカルチャー、ブ
ランド品まで、コンパクトなエリアで多様なショッピング
が満喫できるミナミ。商店街の人たちはきょうもハン
グルや中国語のお客さんに笑顔で対応しているようだ。



大阪

- ① エネルギッシュなまち・大阪ミナミ、日本人に交じってアジア諸国からの観光客も多い
- ②③ 日本橋界隈には東南アジアからの若者も少なくない
- ④ 電気部品店や家電店が集まる日本橋「でんでんタウン」
- ⑤ 中国語やハングルの文字が目を惹く、戎橋筋商店街





- ①留学生交流情報室で母国語の新聞を読むタイからの留学生
- ②「My Country, My University」で自国紹介をする台湾からの留学生たち
- ③「多文化コミュニケーションプロジェクト」の公開授業には多くの留学生が参加
- ④互いの母国料理を味わいながら交流を深める「世界の料理パーティ」

留学生を“熱烈歓迎”

大阪大学

実学、漢字という共通点

各国の留学生がつくった母国料理を味わいながら留学生同士や日本人学生との交流を深める「世界の料理パーティ」、世界各地からの短期留学生が母国と母校を紹介する「My Country, My University」、学部所属の留学生と一般学生を対象とする「多文化コミュニケーションプロジェクト」の公開授業——晩秋の大阪大学豊中キャンパスで、阪大留学生センター提供のイベントが開かれた。中心となったのが、アジア諸国からの留学生だった。

○九年五月時点で、大阪大学在学の全留学生一四五五人のうちアジアの留学生は七七％。学部生なら約九割だということである。国別に見ると、中国四四三人、韓国二一五人、タイ九二人、ベトナム七九人、インドネシア六四人、台湾六三人、マレーシア五三人などが上位を占める。

なぜ、多くのアジア人留学生が阪大にやって来るのか。留学生センター副センター長（教授）の三牧陽子さんによれば、一つは、実学志向の強いアジアで、最先端の研究や技術を身につけようと、世界トップクラスの阪大の

理工系分野を目指す留学生が多いこと。また、中国や韓国の人たちは同じ漢字圏で、歴史的・文化的つながりの深い関西に親近感を抱いていること。

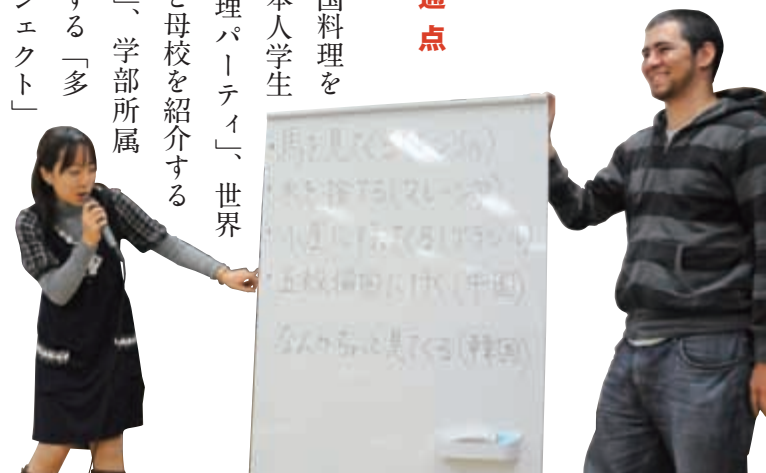
「中国や台湾の留学生は、留学前に日本語をきちんと学んでなくても、漢字を見れば大体意味が掴めます。また、日韓両言語は文法的に近いので韓国の留学生は上達が早く、『夏休み期間中に自学自習した』と流暢な日本語で話し、何年も日本語を学ぶ欧米からの留学生が驚くこともあります」と三牧さんは笑う。

さらにかつて阪大に留学し、母国の大学や研究機関で活躍する「先輩」に勧められて、というケースも少なくない。三牧さんによれば、日本の大学院に入ると、研究室の教員の指導や院生の手助けを得て、自分で研究計画を立て、自分のやりたい研究に取り組む力がしっかりと身につくため、留学への期待が大きいという。

地域ぐるみの留学生支援

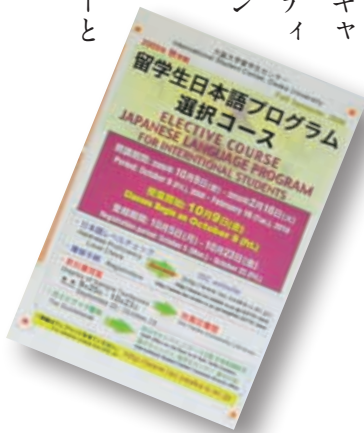
そうしたなか、阪大に学ぶ留学生の日本語習得と交流や生活支援に取り組んでいるのが留学生センターだ。

留学生に、限られた時間で留学目的達成に不可欠な日本語をいかに習得してもらうか。とりわけ大学院進学を目指す大多数のアジアからの留学生には、専門科目の授業を理解し、日本語でレポートを書くといった、大学院入学後に必要となる「アカデミック」な日本語教育に力を注いでいる、と日本語教育部門担当の三牧さんは強調



する。また、短期留学生を中心に、留学生は総じて大阪での生活文化に好意的だ、とか。「みんな、フレンドリーな大阪人のコミュニケーションスタイルがすごく好きで、大阪に来てよかったと言ってます」(三牧さん)。

留学生の交流や生活支援は、吹田、豊中、箕面各キャンパス内の留学生交流情報室(IRIS)とボランティア学生が中心となって、ウェルカムパーティーやキャンパスツアーをはじめ多様な交流会を開催。また、地域には留学生を家庭に招いたり、日本語教室を開くボランティア組織がたくさんあり、留学生センターと



①大阪大学留学生センターのある、吹田キャンパスのICホール
②吹田キャンパスで語り合うアジアからの留学生たち

協力して、地域ぐるみで留学生を支援している、と同センター交流指導部門(教授)の有川友子さんは言う。ユニークなのは、地域の小・中・高校の国際理解教育への参画だ。当日、生徒たちは事前に調べた留学生の母国について発表。留学生たちは自国の言葉や音楽、踊りなどを実演して楽しく交流し、互いの国際理解に大いに役立っているようだ。

留学生センター長(教授)の菊野亨さんは、世界の料理パーティー会場で留学生と一般学生が楽しく食べ、語り合う光景を眺めながら、「留学生受け入れ目的の半分は、一般学生がアクティブな留学生と交流し、国際的な視野のなかで学問研究を深めてくれることだ」と言う。

なお、〇九年度、大阪大学が「国際化拠点整備事業(グローバル30)」に採択されたことに伴い、留学生センターは今年度中に「国際教育交流研究センター」と名称を変え、一〇年度から受け入れ留学生倍増を目指している。

明治開港以来、神戸華僑社会の発展とともに育ってきた共生型チャイナタウン「南京町」、温泉リゾートとして賑わう「白浜」、アジアからのショッピングのメッカとして注目を集める「大阪ミナミ」、千人を超えるアジアの留学生が最先端研究に挑んでいる「大阪大学」——それぞれの地域特性を生かしながら、アジアの人々が暮らし、訪れ、学び、触れ合うなかで、アジアの一員としての関西の新たな生き方が育っていくだろう。 **躍**